特245
554

嵐を衝く

荒木貞夫閣下序文校閲
石井三郎著

始

特245
554

荒木陸相題字

著者近影

序文

皇國日本は今や、內外凡ての方面に對する轉換、發展再建、それが爲めには先づ一切を整理淸算すべき劃期的時代をひた進みつつある。

非常時と謂はるる、國家緊急狀態は既に獨り我國のみならず、頃者歐米列强を擧げて、愈々深刻なる急迫異常性を呈しつつある。この國際的情勢、並びに動向の指示する處、畢竟我等のそれを欲すると欲せざるとに拘らず、皇國日本の存立根本に決定的意義を繫げる一大國難は來つて、我等の前關に立ち塞がることあるべきを、當に豫期せねばならない。

然してその一大國難が如何なる形に於て到來し、如何に深大に、如何に痛刻なる衝撃を我等に試みんとするか、それは問題ではない。

我等は夙に國民と共に、最惡の時態に臨む決意に於て、信條に於て、自信に於て毅然として微動だにせざる、絶對不變の心境を用意して居る。この決意の發する處、皇道精神である。

事變以來皇軍の活動、日夜惡戰苦鬪を繼續しつゝある處は、この大精神、大理想の崇高なる發露であり、一貫せる遵奉である。

國際聯盟總會に於て、四十二對一の數字上に力强く、東洋皇國の立場を宣言せる處は、この大精神、日本國民精神の嚴肅なる表現であり、この大精神に基礎せる我等の大信念の前には、聯盟の三年越の饒舌と、山の如き決議も何等の權威に値しなかつたことを明快に立證されたのである。

皇道精神の外に對して發揚されつつある思想根柢は、謂ふ迄もなく平和と正義とに立脚したる、隨つてこの精神と相容れざる『あるべからざる』ものの一切の排撃、否定を意味する。

その國内的に國民の嚮ふ處を示せる、精神内容に至つては、皇國日本として、あり得べからざる何ものをも包藏さるべからざることは言を俟たない。

然かも、皇道精神は非常時日本國民が、非常時に於て新にとり入れたる、又は解義を新にせる思想精神でなく、皇祖建國の本義に根基せ

る日本民族萬古不變の大精神を貫ける民族思想であり、內外に對する國家原理であり、凝つて皇軍精神となり、映して國民思想を成す。

この明透なる理念を解すれば、今日重大時局に立つて、思想國難、思想對策等と國民同胞が內部的に對立拮抗する階級的思想の根據は一朝にして解消して、苟くも日本民族同胞たるもの、一致團結、祖國の共同戰線に據つて、一齊蹶起直進の必要に迫られつつある實情は、何人と雖も痛感措かざるものがあらう。

心友石井三郎君、皇道主義の宣布に竭さること多年、今又陸軍參與官の重職に在り、政務に抉掌する傍ら、時局に對して深憂歇まず、乃ち年來奉ずる處の牢固たる信念に基き皇道の大精神を內外時局の動向、實相の上に引例して、傾向を批判說破し、從來唱へられて來つた、動もすれば空漠として捕捉し難き概念的說述から一歩突込んで、國家現下の重大立場と、國民の即實的環境の上に活かしめて、而も大膽に論斷せる、殊に思想對策に關する筆者の所論は、正に一見識たるを失はず。

全文を通じて余と感銘を同じうせるもの頗る多い。

敢て序を寄する所以である。

昭和八年四月一日

荒木貞夫

著者の言葉

外に國際情勢の緊逼、殊に聯盟脱退の列强に對して與へたる波紋、吾人は今、最大の注意を以つて巨細に、その動きを凝視、監視しなければならない。

内に重疊粉淆する各般の懸案問題、就中思想問題對策は、この重大機局に臨める八千萬國民同胞の對外的、陣容、態度姿勢と、最も密接なる相關關係を繫いで居る。

思想對策懸案の解決、今やこれを目指して政府當路者初め、教育輿

論指導各機關を通じて、腐心努力至らざるなきところであるが、政治經濟、社會、組織機構の實狀に於て、思想問題に關する疑義と、赤化策動の不逞企圖等に乘ぜらるる如き間隙、缺陷を暴露せる根本的事實に對して何等の認識反省なく、一面に於て、日本個有の民族的理想、國民精神、卽ち日本主義傳統思想に對する根本認識を、等閑に附して然も區々たる對案對策を求めやうとするが如きは、思はざるも甚だしきものと云はねばならない。

先づ脚下を照顧せよ。革正一新。しかしそのための根本理念に於て目新しい何ものをも持つて來る必要はない。ロシアの智慧を借用する必要はない。マルクスの公式は日本の方程式に當篏らない。ヒツトラ

ー獨裁下の獨逸は獨逸、伊太利は伊太利でよい。

自家の心事自家知る。吾人は唯建國三千年一貫せる國家と民族の精神理想、國民思想を直視し、再認識味得して强力なる結束の下に共同の陣營を固めねばならない。その方法は、今日に於ては既に消極的防護の手段を繰返すのみでは、啻に何等の匡救の實效を期待し得られないのみか、姑息退嬰の結果は惹いて國步を誤らしめ、容易に收拾し得ざる事態を招來すること無きを保し難い。卽ち今に於て對策の根本を國民同胞の抱ける自らの中なるものに求めて、積極拔本的方策を樹て解決に當らねばなるまいと信じる。この意味に於ける解決の具體的方法は、素より國家權力を前提とする愼重なる問題であること謂ふを

俟たないが、以上に就ての私の素懷を點述し『擧國挺身の旗下に』と題して國民新聞に連載（昭和八年三月廿四日――卅一日）せられたる小論を骨子として編れたのがこの册子である。

夙に高邁なる識見に依り、私の年來の信念所懷に對して、鞭撻し勇氣づけられる荒木陸相閣下の校閲を煩はし、題字、序文を賜つたことを光榮とし、謹んで茲に深く感激、感謝の意を表する。

昭和八年四月上浣

石井三郎

要目

第一、一連の火と燃えて……一
……非常時民心の異狀と緊急焦眉の對策根本題目……七
……電撃の如く我等の血管に傳はれる精神的動員令……
第二、指向目標を仰いで……一〇
……皇道精神を現下同胞内外現實の環境に齎らして……一四
……皇道精神の指示する帝國の外延的政策の基調……一八
……列强國家主義民族膨脹主義の澎湃たる傾向をこの事實に見よ……
第三、國際主義は何處へ……二三
……米國の關稅引下提唱は裏面に何を意味するか……二八
……我生命線は前進する、せざるを得ない……
第四、皇道皇軍皇民……三三
皇軍構成の原理と君民一致の思想根柢……
第五、偉大なる沈默、先人の垂訓……

……過去に大國難の「忠君愛國」「義勇奉公」の大文字は非常時現在に移して何と映ずるか……三八
……帝國主義資本主義戰爭本來の意味と反戰運動者の認識不足……四六
……蘇邦陸軍の本質と精神的團結の威力……四九
……國軍の一元的指導原理と皇軍、蘇邦陸軍の對照的觀察……五二
第六、國民精神の總動員
……近代青年の支配哲學の上に現はれたる學校教育の現實暴露……五六
第七、結語
……非常時國民思想は强力國策の下に統制せよ、思想を單一の中心へ……六一
……活眼を大局に、太き輪廓を定めて對策にかゝれ……六五

嵐を前に

陸軍參與官　石井三郎著

非常時民心の異狀と緊急焦眉の對策
根本題目

第一　一連の火と燃えて

現在、我國は如何なる方面に於て、最も緊急非常の事情を横たへて居るか。

時局下の日本は强力なる陸海空軍の裝備を絶對必要とする、鐵・石炭・重油の必要が叫ばれる。各方面に亙つて痛切に示され

つゝある資源、原料の不足と缺陥を充足すべき一切の夥しき必要、それらの何れの必要にも先だつて、國家が我々に即時充足、確立を熱求しつゝある、必要の最大にして且、最根本的のもので焦眉喫緊の題案がある。謂ふまでもなく國民精神の充實、國民思想統制の急務これである。

陸に、海に、空に帝國の軍備は今や世界の何ものを惧れざる精鋭無比、威容堂々、自他倶に相許して居る。だが我々が將に乘入れんとする天地晦瞑の暴風圏は須く明日の變局と同時に次いで來ることあり得べき明後日の變局をも豫想しなければならぬ。國家の外敵は常に必ずしも前面から又は上空からのみ攻擊を加へ來るものとは限らない。關

ケ原の一戰は西軍一角の寢返りに因つて大阪方の大敗に歸し、西部戰線の動搖は一夜にして帝政露西亞を覆滅せしめ又唯一の强味たる國內統制に於ける組織と秩序を崩壞せしめたる內部的混亂が、獨逸の戰敗をして決定的に運命づけたる如き事例に見るまでもなく明かであつて戰爭の手段方法は武力行使以外に敵の後方本國を攪亂する思想宣傳の方法を重要視せられて居る。例へばレーニンが唱へた如く『平和は他の手段の一切を以てする戰爭の繼續なり』又は『戰爭は政策の延長なり』としてソヴイエイト赤軍はその所謂社會戰に依り武力戰よりも敵國の思想分裂を主眼と爲しつゝある事情に鑑み今日我國思想的動向の上に極めて多岐複雜化せる難時相に於て皇國の興廢を賭する國難の前

に擧國民衆は精神的武裝を完了し一齊に待機の姿勢を構へて居るか、否か、上下を擧げて、打つて一丸とすると云ふが如きことを然く簡單に考へらるゝか否か、國家多端、情勢日に急を愬へつゝある昨今、爲政者、財閥の依然たる無反省、最近頓に相續いで思想的不祥事態を續出しつゝある社會の實相に顧みては寔に深慮に禁へざるものがある。

大事決行の直前には、一個人の場合に於ても精神集注、統一を必要とする。況んや國家の乾坤一擲に於てやである。

一劒を執つて敵に立對ふ神武不殺の心境は心中微塵の俗慮雜念を止めず、明澄透明の所謂無想無念の境地にまで精神を統一する一大修錬を要する如く、又破邪顯正、正者必勝の大信念に發して初めて敵を仆

し得ると同じく、國家興亡の歴史の跡に徴して明かなる如く一大飛躍興隆を前にせる民族國家は孰れもその超躍に件ふ民族心理の統一、祖國愛の白熱になる擧國一致の精神的團結に依つて、初めて覇業を完うせることは明治維新が勤王討幕、民權確立の大スローガンに依つて皇道新政の基礎を樹立せる、日清、日露戰役に當つて、忠君愛國の國民精神を一貫して、國難を轉じて國威の歴史的發揚を收めたる、また近くは日支事變に際して、擧國皇道精神の振起昂揚せると、並びにその皇軍指導精神との完全なる合一に依り今日までの成果をもたらし得たる事實に併せ想へば極めて明瞭である。而して日支事變に端を發せる東亞時局拾收、國際的列强爭覇戰に發展せる非常時の風雲は、國土と

日本民族の存亡消長を一擧に決し去るべき颱風の中心は、今や刻々日睫の間にまで迫りつゝある。それは漠然たる對某々國との戰爭不可避の豫言的警告に止らず、最近の英國が强行せんとする我對印貿易封鎖に依つても窺はれる如く、武力戰爭と紙一枚の關係を有する國際經濟下の情勢に於て既に戰時體勢に置かれつゝある、現前の事實として示されて居る。

電擊の如く我等の血管に傳はれる精神的動員令

秋。一歩を誤らんか皇國の興廢を決すべきこの歴史的重要立脚地に立てる我等同胞を驅つて一齊に動員、前進を要望する至上命令——(それは云ふまでもなく上御一人の御名に依つて發動される大權に一致するが茲では國民自身が體得認識すべき絶對的信念の意味) 感奮蹶起、挺身祖國の難に赴かしむべき大スローガンは何か、更めて吾人が謂ふまでもなく光輝ある傳統の力强く示せる「君國の爲め」即ち皇道精神の發露これである。然して皇國、皇軍皇民三位一體を形成して絶對に分離すべからざる帝國の構成に於て『我等何が故に戰ふか』の軍人の立場と實質的に全然同一立場に立つ國民が皇軍將士とその理念、道念を一にし思想

感銘を同じうして兩者に間然たるものなきまで交結合一することは難局打開の絶對的前提でしかも國民一般が理解するその精神、皇道精神に基礎する日本精神の徹底が今日の國民教育に於て鼓吹されつゝある忠君愛國、義勇奉公の修身教科書程度以上に、忌憚なく謂へば活版刷の觀念から一歩突進んで皇道精神に基く、皇國構成組織の根本原理、皇國を形成する國民一個々々の持場、生活的立脚點を闡明し、個々同胞に就てその胸奥に不滅の民族的自覺の烙印を深刻する事は正に當面裝備第一の要諦であり急務たることを閑却してはならない。

この問題を閑却し、度外視しては斷じて未曾有の國難突破局面打開は望み得られず、隨つて昭和維新回天覇業の終局的完成、隨つて國民

生活の安定も充實もそこに全くあり得ないことは睹易き道理ではないか。然らずしてこの秋、この機に臨んで同胞國民が眞に日本民族の個性に還元し、大局を達觀洞察し、今に於て國内的雑音、一切の夾雑物を清算一掃し、とつて動かざる絶對的信念に根差せる皇道日本の命脈國民精神を以て、正を踏んで懼れず、一連の火となつて、東亞に於ける昭和日本の位置と使命を宣告し同時に祖國同胞の威力と氣魄を以て對する場合これこそ正に現代世界を震撼すべき日本民族が歩武堂々の大行進譜の下に日本皇道主義の世界的進出を實證する日でなければならぬ。然らばこの磅はくたる皇道精神は、果して現下の國家内外の情勢に對して如何なる關係意義を呼びかけて居るか。

第二　指向目標を仰いで

皇道精神を現下同胞、内外現實の還境に齎して

一

皇道主義、皇道精神に於て申す處の皇道とは、天皇統治めす御國の道、即ち大日本帝國の國是、國體原理、國家と國民の關係を表現せる根本理念、精神を意味することゝ諸君と共に我々の解するところであるが、由來皇道精神は、神韻漂渺たる史的考證を通じ國學の演義に於て宗教的意義の下に古神道の大義に於て說かれ、國法學の領域に於て論述され、國民教育の過程に於て倫理的說明に依り、國民精神の鼓吹に努められ來つて居るが、以上日本國民としての敬虔なる信仰道義、學究、國民教育の範疇に於て盡されたる皇道觀念、その主義精神に就ては今更說述究明を加へる餘地を玆に見ない。その國民精神振起作興に就て私は大正七年七月皇道義會を創立し右文尙武を旨として青年子女の修練に微力を致して今日に及び、同趣旨に依り曾て「水戸學の本義」「皇道主義の宣傳」「日本國家と富豪（昭和七年十二月）等の小著に於て所懷を披瀝して江湖に問へる處あつたが、今玆に述べんとする皇道精神とは、斯の如く各方面を通じたる考究に於て、その本來の主義精神、即ちその深遠なる皇道精神の本質を新に唱導せんとするものではなく、國民同胞は現下の重大時局に直面して、思念と行動の一切を是に發する源泉、根據、基準を何が故に、皇道精神の一途に繫がなければならぬか、言

ひ換れば我々が今日まで踏み來つた皇道主義の大道は國家と我々同胞の現在の上に如何に重大なる意味を有して居るか、そして皇國と國民同胞の明日を望んで百年の大計を決定する上に、如何に深遠なる含蓄を包藏されて居るかの大眼目に亙つて、實際的に且つ最も平明端的なる解説を試み、非常時日本の政治的に、經濟的に、軍事的に、外交的に、社會的に凡ての上に懸つて皇道日本の指導精神が如何に徹底的明快にして、根源的なる指向目標として今日まで國民の眼前に屹立して居るか、又何が故に國民の大多數はその巨大なる存在の標識を近視眼的に、視野の外に逸して居るかの點に及んで極めて忌憚なき卑見を述べんとするのは一に「我は日本人なりとの自覺の下に、日本精神を同胞國民の現實的還境の上に齎らして、即ち自己識識に出發して時局を正視し、以て邦家の重闘、難局を俱に挺身擔當せんとする同胞諸君と共に我々の適從すべき方向進退を今日に於て明確に約束して置き度いと思ふ。

二

皇道精神の指示する帝國の外延的政策の基調

先づ皇道精神が、我が國の卽今卽實の情勢に於て對外的國民の自國の認識問題と關連して、この精神が帝國の外延的國策に如何なる意味を有つて居るか即ち現下の國際情勢を前にして皇道精神は吾々同胞に對して、如何なる方向にその嚮はんとするところを指し示して居るか。

今や縱横に入組める極東に於ける國際情勢、それは從來の英米對立關係を始め、歐洲列國相互の外交關係、本國の經濟國難切拔けに重大なる關係を有する植民地資源、原料、燃料の爭奪、貿易、關稅の利害關係、投資範圍の爭奪、對外資本の角逐とそ本國植民地及び屬領相互

間の行詰り現狀の打開の活路を悉く極東方面に見出さんとして今日までの自由主義貿易時代に於ける激甚なる國際資本戰爭、經濟競爭は一轉して國家權力に依る統制經濟から武力を背景とする外交、政治的手段、卽ち强力國策の斷行に依つて自國の勢力範圍を決定せんとし、所謂東亞分割政策が最も露骨に行はれんとする傾向を示し來つたことはジュネーブに於る聯盟會議の經過の上に此關係は極めて明瞭に看取される如く、最近英米兩國が極東支那に於る相容れざる兩個の代表的白色帝國主義利害關係にも不拘、滿洲問題に就てのみ對日本共同戰線を以て臨み來らんとする情勢を示せること、その背後に戰債問題に關する兩國間の駈引が含まれて居るが如きは要するに聯盟の日支問題處理

の態度は、現下の強度に尖鋭化せる列強國家主義が、相互に表面的に日支紛爭問題の討議に名を藉つて、自國の足固めを有利に導くことのみに專念終始し、日支問題を以て目標を他に置ける外交國策の具にさへ供しつつある。斯る關係列國の前に、如何に日本の立場を說くも誠意も正義も徹底する筈なく、この邊の事情を一顧すれば聯盟脫退を狐疑し其結果を憂慮すると云つた如き、腰拔け認識不足の議論は如何にしても差挾み得る餘地はない筈である。

然も歐米列强の對極東關心は前述の如き東亞分割政略の露骨極まる表示に依つても看取される如く、英米列强相互の修交關係の表皮一枚の下には紘々相摩し劍尖交錯しつゝ深刻なる反噬拮抗、正に一觸卽發

の危機を孕みつゝある、眼前の世界非常時の情勢事實を直視しては、如何に夢遊病者の囈言コスモポリタンを振り廻す一群の人の放言にしても、頭上に砲彈を見舞はれつゝ國境開放も、反戰運動も、世界主義も、國家主義の論爭もあり得たものではあるまい。國家の存在發展に關する優劣を決する比高水準は今日に於ては、最早國體の崇嚴、民族の優越、光輝ある歷史と强大なる軍備等のみを以て標準と爲し得ない。是等要素に基礎せる政治形態の合理性、國民道德、文化的充實最高段階は素より必要であるが、第一に考慮すべきは國家民族發展に件ふ資源の問題である。我國が領土狹小、資源物資缺亡を告げ、八千萬人口を擁して國外發展の途を梗塞されて居ることは今更述べるまでもない

三

列强、國家主義民族膨脹主義の澎拜たる傾向をこの事實に見よ

或る論者は、國際自由貿易主義を理想として、物資の交易、商品交換を自由にすれば大して困ることはない、我が國の紡績業がアメリカや印度の棉花に依つて現在の發達を遂げたのは其一證である。

然るに近來民族主義や祖國主義が流行し出してから列國は悉く移民を制限し、又物資の自由輸出をも制限しさうな傾向を生じて來たと爲す者があるが、貿易自由主義、關稅保護政策がいゝか惡いかは當面の議題でない。

問題は列國の轉向しつゝある超關稅政策を向ふに廻して、日本は如

何なる對策を講ずべさかゞ今日の問題で、資源物資、商品交換と云ふが第一、輸出すべき如何なる物資を有して居るか、又現狀に於てそのの資源を何れに求めようと云ふのか、棉花加工に依る纖維工業は成程そのお庇で英國の壘を摩するまで發達を遂げたが、輕工業立國では今日以後の日本は既に立ち行かない。

其傾向が今日列强共通の深刻なる惱みの種であり、我國の產業立國策の根本的立直しを要求しつゝある傾向は次に一言するが、若し夫れ祖國主義、民族主義の流行に依り、列國悉く移民を制限し、物資の自由輸出をも制限する傾向と觀るに至つては、正に眼前世界の大勢を股間から逆に打眺めた云ひ方で、列國の人口食糧問題と、國際資本主義

の行き詰りから、自由主義經濟を統制經濟、列國經濟ブロックからの必然的要求に依る超保護關稅主義に一齊に轉向しつつその國家經濟の切實なる情勢が歐米諸國の國內策に強く反映して思想的に民族主義、祖國主義を擡頭せる事實を逆に世界國民思想が今日の國際經濟情勢を決定せりとして、民族主義、祖國主義流行云々として一廉揶揄せる心算であらうが、世界經濟の實情が强力なる對內的には國家統制主義、關稅の障壁を高くして護らざる今日の如き緊迫せる情勢に於ては、列國の經濟的勢力圈は、自らその祖國主義、民族主義の對外防禦線を以て劃さるべきは自明の理で、その蒙は正に國際聯盟を目して國家否認世界主義平和の殿堂でもあるかの如く過信するのと變らない猶また、對外的には世界各國が底止する處を知らぬ高關稅政策を以て相對抗し自國の經濟範圍、語を換へれば經濟領土を擴大せんとする、所謂經濟ブロック形成の欲求は愈々顯著なるものがある。

例へば佛國の主張する汎歐羅巴主義、英國の主義する大英帝國再現主義、米國の主張するモンロー主義及び對支積極政策は何れもこの經濟ブロック獲得競爭の表はれに過ぎない。この點に於て一昨年九月十八日以前の日本は、非當に立遲れ之等列國に先んじられて居た觀がある、と斷言してよい。

米國の關税引下提唱は裏面に何を意味するか

最近に米國新大統領ルーズベルトは世界貿易の行詰まりに深く鑑みる處あり、その衰頽せる對外貿易を復興せしめんが爲に各國に對して關税引下を提唱すると傳へられるがこれ米國が自由主義貿易への還元を主張し、以て現下の國際競爭を緩和せんとする意思より出たものではなくして、自國の狹隘化せる國外市場を競爭各國よりとり戻さんが爲めの一手段に過ぎないのである。卽ち米國のこの提唱は各國に向ひその市場を寄越せ、然らば關税を低下せんと云ふに過ぎないものである。

されば、これは論者の所謂平和主義、國際主義とは何等緣故なきものであるとして、隱然たる形式に依る國家主義、民族膨脹主義を意味するものである。

以上歐米列强の最近の轉向に見ても祖國、民族國家主義に據らざれば、難境を打開し得ない深刻なる惱みと傾向は我國の對外的立場還境の上に一層適實痛切なる關係を伴つて我國家と國民に對して、如何に重大な決意を促しつゝあるかの事情を概言しよう。

自由貿易時代は過ぎ去り、資本獨占主義、統制經濟時代へと世界の大勢が推移しつゝあり我國もこの潮流の支配を免れず、自由貿易時代以來國内産業の首位を占め、現に輸出の大宗たる生絲綿絲を主とする

纖維工業に依つてのみ今日を支へ、將來の凡ての意味に於ける國際競爭を乘切つて我が國の存立、發展を期し得ないことは、紡績界に於て世界の王座を占めたる、英國の纖維工業の根源地マンチエスターからバーミンガム工業地帶(重工業地帶)に工業の中心地が移動せる事實が雄辯に立證せる如く、自由貿易時代に於ては、英國の極東政策も商品賣却、市場獲得が最大眼目であつたが、前世紀末葉より勃然として起り來つた製鐵、造船、機械工業の發展に伴ひ英國は輕工業より重工業立國へと國策の轉換を餘儀なくせられ、乃ちその傾向は單に商品を賣ればよいでは濟まされず、工業原料及び投資範圍を外國に求めなければならぬ必要に押出されつゝある、この傾向ば最近支那に於ける、英米の鐵道獲得政策の上に最も鮮明に表はれて居る。以上の列國貿易重商主義が重工業立國への飛躍轉向を示せるものは、第一に白、獨、米各國戰前から戰後にかけて佛伊兩國も急速なる發展を示し、殊に最近注目すべきは露西亞はこの傾向に注目し、一切の產業政策を犧牲として、その五ケ年計劃に於て、大組織、大規模の重工業的基礎の確立を遂げたことであるが、翻つて日本は、今日まで產鐵類に於ても、產炭額から云つても、世界重工業競爭の範圍より除外せられ、前述の如く立遲れの姿になつたが、當面の原料、資源缺乏を、滿洲開發に依つて補充し炭鐵根據地を茲に確立したが、更に將來の大發展を期し、英米と對抗して重工業に於ける競爭に列伍せんと欲すれば、現狀の儘を以

てすれば、それは明かに到底不可能である。

將來の大發展か、行き詰りか、その對外關係に於ての分界線に立てるが今日である、我が大陸經綸の必至性が是に胚胎する。往年豐臣秀吉が明國征伐を志せる動幾は、當時の情勢を想像して、西歐の列强の支那に對する商業覇業權獲得と次いで大陸に伸びんとする領土的野心を看破し我が國の海外商權進出封鎖に先だち、大陸進展を決行せしものと觀らるが、今にしてその覇業を想へば烱眼驚くべきものあると謂はねばならぬ。

而して今や支那は、統卒者を失ひ、民族國家の理想を失つた支那は、軍閥將領の內部的鬪爭と混亂の裡に、歐米列强をして經濟的領土の分割獲得擴大縱橫の手に委し好んで自國の原料資源を化して白色帝國主義競奪の餌食として提供しその全土を擧げて底止する處を知らぬ切取分割の競爭領域に開放して居るのである。

我生命線は前進する。せざるを得ない。

前述の如く列強の亞細亞大陸進出、東亞分割政略の根は、列國の國力維持發展、熾烈なる國際競爭の必然性から深く蔓つて、執拗に力強く全支那に働き我國の東亞の盟主としての嚴然たる存在を目して、夫々自國の野望達成の重大障碍と目して、大陸から日本の退場を求めんとして居るのである。

既に列國の根は支那に於いて深い。

然る以上聯盟に於ても、世界憫笑の的となれる支那代表の態度に依つて、最も適切に表白される如く傳統の以夷制夷政略、賣國的外交は依然として今後も絶えないであらう事は容易に明かである。

斯くて支那は何處へ行く、云はずして先は知れきつて居る、だがこの傾向のまゝで押して行つて、歐米列國が完全に支那を自國の經濟的領土乃至植民地化せる場合、日本はどうなる、唯靜かに滿洲國と提携してゐるだけで問題はないのか、我々は今是を考へなければならぬ。否、對策を決して直ちに實行に移さねばならぬ。

云ふまでもなく東洋の平和なくして、日本の存在はあり得ない。現下の情勢を以てすれば、今日熱河を平定しても、列國の支持を恃む不逞軍閥の滿洲國攪亂、抗日反日の盲動は相踵いで豫想される。而して斯る前提の下に、日支紛爭の平和的處理を期待することは全く不可能

である。我々は深く決せねばならぬ。然も我等の意圖する處は斷じて侵略主義を意味しない。皇道精神は大陸に進出して、滿洲に王道樂土の地を築き、今や塞北熱河の地にまで皇威の及ぶところとなつたが、それが斷じて國際的に謂ふ所の領土擴張の野心を充せることを意味しないのみか、軍閥領下の支那の支那民衆に對しては、三民主義の一と雖も實現されず、救國救民、保境安民を標語とし來つて事實に於て苛斂誅求、膏血搾取、凡ゆる惡逆を恣にせる匪賊より被壓迫民衆を解放して、神人道に基く皇威の下、王道德化に浴せしめ樂土を實現せしめた大現實こそは正に、皇道精神に發する民族相隣協力、共存共榮、同文同種善隣の友誼を示せるもので、この大精神の眞隨は到底歐米國家がその唯物觀的皮相の見地を以てしては容易に窺知するを許さないものがあらう。

以上皇道精神が時局に直面せる對外的に深大なる意義を有することは、特に日清日露役當時の我國の對外的姿勢が、祖國の獨立、統一、國民主義の意味の國家主義に立ち、一切の外國からの防護の立場に立てるとは異り、今日に於ては列國共通の植民地、經濟領土擴大時代に直面正對したる、民族興隆發展時代、外延政策敢行時代に進出移行しつつあることを忘れてはならない。同時に護國の第一線、國防の第一義的意義は茲に發足することを記憶せねばならない。

第四　皇國、皇軍、皇民

續いて、皇道精神の内包的意義、即ちこの精神が日本國家の組織、形態、政治、經濟機構の上に、そのすべてを包括せる思想、國民精神の上に如何なる意義を投げかけて居るかの點に就て實證的に個々に亙つて申述べるが、先づ皇道、皇軍、皇民の三者一體の關係は、特に我が國家の中心的構成として最重要の眼目としてこれが基礎的原理、觀念を徹底的に諒得、體識することが現下の最大急務と考へられるから以下この問題から說き進めることとする。

皇軍構成の原理と君民一體の思想根底

謂ふまでもなく我が皇軍構成の原理は、軍人に賜はりたる御勅諭の精神、御趣旨に依つて明かなる如く、建國以來兵馬の大權は天皇親らこれを率ゐ給ひ、上下一貫の命令系統に於て明かにされて居る如く、一兵士に於てもその隸屬の根本關係は、陛下の愛撫し給ふ忠勇なる兵士として、畏くも闕下に直屬する關係を嚴かに示されて居り、上官、下官、上命下從關係は戰鬪の大目的から皇軍の編組、軍紀に依る軍の脈絡確保の上より將校、下士、兵員の各階級の差こそあれ、上官の命令は、それ陛下の御命令たることを銘記されたるに依つても窺ひ知り得る如く、根柢の關係に於ては、天皇と兵士の間に介在する中間的觀念の存する何もの

もあり得ない。而して皇軍將士は國民男子の差等なき權義の關係に於て徴募制度に依り構成せられる。一面皇室と國民の關係に於ては、改めて申述べるまでもなく、一君萬民の本義に依り、廣大無邊の御仁慈に對する萬民欽仰の崇高なる傳統、帝國構成の根原に於て明かなるが如く、一君の下、萬民の平等、大君に對する赤子の關係、そこに須臾も中間的獨立者の介在を許さゞることを以て統制原理とせることの關係は移して、皇室と皇民の關係、即ち大君と赤子の關係は、皇軍に於ては大元帥陛下とその股肱たる皇軍將士の直屬的隷屬關係を説明した場合と同一の意義内容に合致する。

何となれば、皇軍の組織構成は全國皇民、即ち國民赤子大衆を以て

構成分子とし實質内容とせる意味に於て、皇軍と皇民とは、現役として、又は豫後備兵が召集を令せられて、國防第一線に起てると、また銃後に在つて家業に精勵すると否との差こそあれ、齊しく、所謂國民皆兵の本義に則り、國家に對する國防上の部署を擔當せる意味に於て、皇民は即ち皇軍兵士であり、又皇軍將士は一面に、皇民赤子たる關係に立つて居る、即ち前に皇道、皇軍、皇民の三位一體と云ふ語を述べたが、皇軍、皇民關係の實際に之を觀れば、皇軍、皇民は我が國に於ては盾の表裏を謂へる名稱の相違のみで、二者は事實上一體を爲して居るから、軍事上から觀たる我が國の組織の根本は、皇道、皇軍の關係で敢て國民と云ふ語を持ち來る必要も見ない程である。而して皇道

皇軍の二つの觀念は前にも述べた如く二つ別個の觀念ではなく、君民一致、一如の關係、一身一家の關係と理念を同じうして居るから、皇軍を一貫する思想の根柢は唯「君の御爲め」の一語に於てその總てを盡されて居る。

古代列聖御經綸の跡を拜するに啻に農業指導者としてのみではなく工業發展に關しもて意を用ひさせられ、常に國民の文化産業の先驅者としての御治績は文獻の一致する處であつて、この點に於て我が皇室の御盛運は國運の發展、國民の實生活の消長を象徴させるもので、皇道の本義、我が國體の外國君主國と全然趣きを異にせる、崇高なる國體原理を儼存してゐる。

重ねて謂ふ。皇軍の使命、最高の任務は一途唯、皇室あるのみ、而して再び謂ふまでもなく、我が皇室は日本民族國家の、國民生活の、國家と民族萬有の、總ての象徴であらせられる。

皇、民、軍の三位一體の嚴肅なる關係は是に根柢を發して居るのである。

第五　偉大なる沈默、先人の垂訓

一

過去二大國難の「忠君愛國」「義勇奉公」の大文字は非常時現在に移して何と映ずるか

日清、日露戰役に於てはこの精神、皇軍精神、國民精神が「忠君愛國」「義勇奉公」の語に依つて豪宕一貫、上下打つて一丸となり驀地に直進したればこそ、當時の國力、物質的勢力比較の上から問題にならなかつた大國を粉碎して夫の大捷を博し得たのである、その國難打開を爲し遂げた勝因は眞に、擧國一致、渾然純一なる軍民一致の思想、即ち皇道精神を打貫いて、時代の精神が大御稜威に依つて發揚せられたる一事に歸するものと謂ひ得られる。

その日清、日露戰爭當時、皇軍將士と、擧國國民を感奮蹶起、水火も辭せざらしめた「忠君愛國」「義勇奉公」の國民精神的動員令は、昭和の今日と雖もその儘活用せらることに於て日本國家內外の情勢から觀て、何等渝るところはない、否、寧ろ當時に比して何倍かの重大性と擴大性を强調して、この國民的標語は八千萬同胞に對して高らかに呼びかけられねばならない非常時の局面を茲に現出して、大義君國の精神徹底は、今や內外國情の上に極めて深刻なる內容意義を抱懷し來つた丈けに、必死的眞劍味を伴つて惻々として我等の心肝肺腑に迫るものがある。

日清、日露戰爭當時に較べて今日の情勢は、國家の國際的地歩に、內外產業的事情に、軍事に、國民經濟の支配事情に、科學的に、思想的に、凡てに於て隔世の感がある。當時の國民同胞は、一大國難を前にして、直ちに擧國結束した、立上つた、闘つた、而して夫の大捷を贏ち得たのである。その結果燦として國威の輝きは今日に遺されて居るのではないか。

當時の世界を見渡して、唯物史觀も社會科學もなかつた如く、戰爭そのものに對する論議も生ぜず(日露戰當時の少數非戰論者の運動もあつたが、基督教的社會主義學者等に依つて唱へられたのみで問題にならなかつた)國民的醇情は、一念祖國愛に燃えて、凝つて大義君國、忠

君義烈の軍人精神の精華となり、一身一家を棄てゝ凡てを問はず、言はず、いはゆる身を棄てゝこそ浮ぶ瀨もあれ、一切を棄てゝ國家最大の眼目に生きたる先人の教訓こそ、今日の我等にとつて無限に崇高にして偉大なるものを、沈默の裡に一歩も誤らざる日本國民の往く途を嚴かに指し示して居る。

然らば日清、日露當時に對比して、今日の我が國民は、國民的醇情、一死殉忠の至念が薄らぎつゝありや、それは斷じて然らずと私が謂ふまでもなく、這回日支事變に際して、壯烈鬼神を泣かしむる、皇軍精神の最高度の發露、引續き昨今に於て連日新聞紙上に報道されつゝある熱河討伐に於ても、皇軍の精鋭威力、將士の士氣、凡てに於て國民

の滿腔の信頼を恃むに足るものあるを、雄辯に語つて居るが、最近に豫想される更に重大なる變局、國家の全力を擧げて、最後の一兵を覺悟して當らねばならない場面に臨んで、今後久しきに亙つて、臥薪嘗膽を續くる場合を豫想して、國民傳統の精神は、現狀を以て果して益々忍苦と鍛練に依つてその偉大さを加へ、微動だにしない用意の腑が固く決せられて居るや、否や。

二

私は今日の思想動向を目して、內外、自他の認識に於て一致し一元的なる皇道精神の大道に據り、動かざること山の如き毅然たる一つのものに完全に合一されて居るものとは、遺憾にして未だ斷言することに躊躇せざるを得ない。

如何となれば一部に於て共產黨地下運動の如き、非國民的陰謀思想攪亂の企圖の絕えざる、之等不逞漢の盲動は非常時に入り却つて潛勢力を張り、運動方法を激化しつゝある傾向、及び方向こそ左右兩極に分れるが、フアツショ的流義を借りて時局に働きかけんとする者、共に眞面目なる態度を以て、我が國體原理、皇道精神を講究すれば、今日の日本國民として、個人的野望、不純なる感情なき限り、斯る說論を以て、國民同胞の上に實行運動を試みんとするが如き謬つた心境には、立ち迷ふ如きことはなからうかと思はれる。爰に今日までの我國民思想指導方針の根本に一大缺陷が橫つて居るのではあるまいか。皇

道の主義精神は、皇室と皇軍の相結ばれたる關係の上に、最も明白に又端的に表現せらるゝ如く、皇道精神乃至皇道主義は斷じて神秘的假説又は便法から生れ來つたものでなく、日本民族國家構成の中樞、核心を爲せる大實在、國家生活及び國民の私的生活一切に懸れる生ける大指導精神、大理法として太陽と共に、我等の頭上に輝きつゝあるのである。

而してその大精神の啓示する處は、日本民族の血統的原泉、中心に在すところの皇室を指導者に仰ぐ、國民同胞の共生共存、そこにブルジョアとか、プロレタリアの階級的對立存在もなく資本主義も勞働主義も區別しない、外國の追隨模倣を許さゞる皇國君民及び國民相互平等の機構そのもので、一君萬民の我國體觀念を歐米專制君主政體又は民主政體と同一觀念の下に説明し得ざる崇高なる萬國無比の國體構成原理を意味するのである。

三

帝國主義、資本主義戰爭本來の意味と反戰運動者の認識不足

この結論の因つて來る處は、我が國の古典と維新史料の綜合研究に俟つて、明かであり、之等の研究は近く上梓すべき私の手許の出版別冊に依つて明かにする筈であるが、茲にはこの極めて睹易き道理の結論を擴充して喫緊の重要問題、案件に就ての所信を明かにしたい。

既に述べたる如く、皇軍の存在基點、根幹命脈は皇道に繫り、炳乎たる皇道精神の擧示する處は、君民一致、日本民族、國民の一視同仁、共生共存の大理想で、不純不徹底を容るゝ何ものもない。それ故に左翼の常套語として、反戰運動の論據、資本主義・帝國主義戰爭と稱して

國論を攪亂せんと企圖しても、それは全く皇軍の本質を見誤れる、認識不足の甚だしきを暴露せることに過ぎない。

帝國主義戰爭、資本主義戰爭と唱へられる本來の意味は、唯物的國家を構成せる英、米、佛、伊の資本主義國家が、表面に平和を假裝し、內心に於ては資源、原料の爭奪、經濟的領土獲得の爲め對外的に最も卑劣、陰險なる手段を以て、白色帝國主義の魔手を伸し、對內的に、資本財閥の巨手に政府を操縱せられつゝ農民勞働者、小市民を戰場に駈り立て、依つて獲得せる血の代償を、財閥に懷中せしむる如き、例へば最近英國のバクー出兵の如きはその最も顯著なる實例で斯の如きに對しては、資本主義戰爭、帝國主義戰爭の語は當て嵌るであらうが、

これを皇軍の軍事行動の場合については謂ふまでもなく、皇軍將士の我等同胞兄弟の尊き鮮血は、一滴たりと雖も斷じて金融寡頭財閥の利潤に於て、産業資本家の爲めに、況んや野心政治家の政略的犧牲として、失ふことを許さず、戰爭の性質が多くの外國の事例と比較同日の論評を下す餘地のないこと、又明治維新以來の戰爭事變を通じて、皇軍の輝かしい戰史に於て立證されて餘りあり、且つ日本人の常識として、誰しも斯くの如き事理の判斷に迷ふ者は一人もあるまいと想はれる。

蘇邦陸軍の本質と精神的團結の威力

四

若しそれ彼等共産主義民族、國家主義戰爭の誤謬、又は罪惡を指摘して、我等の陣營に來れと云ふならば、然らば彼等の理想鄕、樂土とし祖國と呼んで居るソヴイエイト聯邦は如何。露西亞は今や數に於て、世界第一と云はるゝ强力尨大なる陸軍の軍備を完成し北滿國境に兵力を集中し、種々の攻勢企圖さへも傳へられつゝあるではないか。露國は對外宣傳に於てこそインターナショナルの主義思想を死守する題目の下に、所謂プロレタリア同胞の共同戰線に立てる所謂對ブルジョア國家の鬪爭、戰爭と高唱はすれ、事實は最も强力なる國家主義戰爭と何等異なれる處

がないばかりか、歐米白色帝國主義、資本主義國家に對して隱然として、その巨手を差伸べて軍國的脅威を投げかけて居るのではないか。

五ケ年計畫完成後の露國は、世界共産主義、國境撤廢の當初の看板にも拘はらず、現に世界列强の孰れよりも、遙かに卓拔せる經濟的國家統制を完成し、政治機構に直接關連を有する赤軍の訓練と、戰鬪配備を完了し何國よりも遙かに周到にその國境の守りを嚴にし、今やその鋭い偵察の眼を西に、東に働かして居る。

この即實の情勢をすら忘れて、祖國日本の非常時に乘じ、好機至れりとして、國民思想を攪亂し、皇軍兵營の窓を窺ふ如き小兒病的認識不足の不逞漢は、今日に於てはその憧れの「祖國」たる「ソヴイエイト本國」に立還つても、民族同胞の裏切り者として、相容れられまい、それ等の輩は宜しく差當り、混亂の支那本國にでも乘出して、無益の抗日反日鬪爭に對してそのスローガンを振廻すことが時宜に適し、主義に最も忠實なる所以であらう。

以上赤露陸軍に關する引例は、偶々以下の如き對照的觀察に援用することが出來る。

五

國軍の一元的指導原理と、皇軍蘇邦赤軍の對照的觀察

即ち赤露陸軍は、實戰を經ない以上その眞價の程は未知數であるとしても、何が故に列强からその精鋭無比と世界的脅威の强力さを想像され、注視の焦點となつて居るかの實際的事情こそは、日露兩國は思想的に對比し得ざる相異れる根柢に立つて居るが、兩國の軍隊の本質は、世界列國の軍隊を通觀して、正に好箇の代表的對照を爲して居る。即ち赤露陸軍は未だ一戰を交へずして列國から、その優越精鋭を想像されつゝあるは、同陸軍の所謂機械兵團、化學聯隊等の戰鬪能力の物質的換算からの觀測のみならず、他面に軍隊が單一の思想に依つて完全に掌握されて居ること、否、寧ろ思想を前提として軍隊は成立つてゐる點にその特異性が存在するのである。即ち、聯邦軍務法に於て「手に武器を以てするソヴイエイト聯邦の擁護は勤勞者のみに依つて實現され、非勤勞勞働分子に對しては他の軍務を課する」と明記されてゐる。又同樣に兵營、部隊集團の結成は、得意の細胞組織を以て水も洩さぬ細密堅犖なる絶對に異分子を容れざる思想的堅壘を以て固められ、如何にして鬪ふべきやの戰爭技術の研究、習熟に擧國的努力を傾注せる以外に、戰勝は單に物質的優越のみに依つて決定されず、精神的優越に依り左右せられることをその政治教育に於て强調して居るに觀ても、容易に想像され得る如く、一に自ら陸の精鋭を豪語する所以のものは、赤軍

の思想的、精神的團結の威力に在る。精神的、思想的團結の威力。而して此場合露國の思想の赤たると白たるとは問題ではない。

皇軍の本質と、ソヴイエイト赤軍の實質とは素より同日の對比を許さゞるものあるが、大戰後陣容を建直した露西亞陸軍が斯くも急速に組織的に訓練、整備の充實を圖り得たのは、全軍に流るゝ根强き單一なる思想、指導原理の一元的基礎の上に發足、進展せるに因るものと觀るの他はない。

皇軍の場合に於ては、自ら昨日や今日の赤色露軍と異り、光榮ある歷史的背景を擔ひ、皇國の軍人精神は、繰返して述べた如く、皇軍民一體不可分の單一思想、卽ち皇道主義の大理想、大精神を心魂に徹し

て今日に進み來つたのである。而して私は萬々そのことなきを期して居る。信じて居る。併し玆でぐらついては國民の一人たりとも傳統の大信念を動搖さしては、それは眞に容し難い民族的の罪惡者、皇國、皇道への反逆者であり、日本國民としての自殺であることを强調すると同時に、皇道精神の徹底が、不言の裡に如何に雄辯に日本國家と民族の雄大性を語り、如何に透徹なる國民生活の各部門に對する合理化性を啓示しつゝあるかの含蓄を體識自得すべきであらうと信じる。而してその時機は今日、唯今を措いては絕對にあり得ない。

第六　國民精神の總動員

日本青年の支配哲學の上に現はれたる學校教育の現實暴露

最近私を訪はれた滿洲國要部に在る日本人某氏の述懐であるが、滿洲國官吏採用試驗に當つて、大學專門學校の學窓を巣立つたばかりの青年に對して、第一に發せられた口頭試問は「日本魂とは何か」の問ひであつた、之に對して誰も首を傾げて答へる者がない。「然らば日本精神とは何であるか」に之に對しても同樣「さあ……」と云つた有樣で誰も卽答出來なかつたと云つて、その人は痛嘆を洩らして歸つた。折も折、時も時、近來これ程考へさせられ、强く胸を搏たれた問題はない。これが若き

日本を背負つて立ち、志を大陸に展べんとする、然も帝國最高學府に學んだ日本青年の思想根本であり、支配哲學でありとすれば全部が落第であり、零であり、寸前暗黑で、大學教育の解消を意味する。こゝまで來れば沈痛である。

この因つて來るところを檢討するに、一半は正に文政當局、率直に云へば歷代文部大臣に今日この趣向を、見透す人物のなかつたこと、最大肝腎の題目を等閑に附した曠職の譏りを免れない。なんとなれば、大學に於ける講座の存廢、內容要目については、いはゆる學府獨立の神聖を侵さゞる範圍に於て、文部大臣はこれが董督指導の權限と責務を有するからである。その補弼の大任亦是にある。その可能なる證據

には、今日まで學究に忠實にして、異端として帝國大學を去らしめられたる學者の多くを吾々の記憶の中にも算してゐる。則ち之を積極的に行つて大學教育に國家の大生命を吹き込めないでは帝國の文相は濟まされない。

同時に責の一半は、直接、學生、並に研究指導の任に在る大家諸先生に歸する。我が學問の殿堂は世界的比高に於て、燦爛として大成の域に達したと自ら任じて居るが主として形而上の科學的部門に於て、現情の如き飜譯的祖述の他に、日本的の何ものかを抽出研究が完成されて居れば、西歐哲學、東洋哲學の分類の他に嚴存する日本哲學を生かして體系的に確定されて居れば、所謂思想國難の打破の如き、夙く

の昔に容易に行ひ得たであらうと思ふのは、敢て私の獨斷と寡聞の故を以てとしないであらう。

その現實暴露は、日本の大學に外國留學生が居るか、否かの事實に明かである。來て居るのは支那人のみではないか、眞に法經、文の部門に於て、日本主義哲學、日本主義科學が確立大成されて居ないから、彼等は日本に就て問ひ、學び、研究せんとする何物をもこゝに見出さない。なんとなれば彼等の國の學說がこゝで紹介され、この國の形而上學問の基礎體系となつて居るから從て留學を必要としないのである。

近代科學の組織と體系を組んだ社會科學と、近代哲學、科學として研究を遠慮される日本精神の基礎を爲す皇道精神、皇道主義の根本體

系は近代日本思想國難の根源を爲して居るのだ。而して皇道精神は建國以來の傳統を踏める近代日本主義は、繰返して述べる如く斷じて索漠として空間に彷徨へる氣魂ではなくして、我が民族同胞の今日の生存、明日への發展、皇國の存立運命國運の飛躍高揚に、しつかりと結ばれた、否一身同體を爲した大自在の生活原理であり、明瞭著大なる共同の行進目標であり、民族同胞の旗印であり、皇道精神こそは實に一語にして掩ひ得る、皇國と日本民族の因つて生れ據つて在り、故にこの大存立を確在し、而して擴大せしめんとする國家內外に外する我等の一大宣言表示に他ならない。

第七　結　語

非常時國民思想は强力國策の下に統制せよ思想を單一の中心へ

皇道精神の內包的根本義に就ては、既に要論したが、內政の現狀、經濟的、社會機構の實狀に照して觀れば、政治的に觀て單に議會主義是非の論爭や、憲政常道論其他片々たる政策是非の問題ではなく、凡そ皇國國體の本質と經國の一大國策樹立君民一體を究極の目的となる昭和維新完成の前には、凡ゆる非日本的不合理は淸算さるべく、この爲めには憲法の改正も行はるべく、國政の反映して今日爲せる一切の根源的誤謬を一掃して勇敢に立直さるべく、經濟的機構に於て、新興滿洲國が、王道

主義經濟樹立に當り、日本の資本主義經濟は、露西亞の共產主義と共に斷じて採らざる旨を大膽に指摘せる如く、叙上の國家が對外的に經濟的發展の一轉期を劃さんとする意味からも、現下同胞大衆の經濟的生活との關係に於ても、日本は資本主義經濟なりとして、現狀を墨守する必要は見當らない。

社會組織の上にも、眞の君民一體の理念は實際的には、政治、經濟的事情に依り、君民の間を必要以上に離隔され、やゝもすれば階級的觀念の如きを想像される遺憾があり、そこに兎もすれば乘ぜられる思想的間隙が生ずる。が、併し皇道精神に於ては素々階級觀念を問題としないこと、亦前述に盡せる通りである。（詳細拙著「日本國家と富豪」參照）

それ等の懸案の解決、すべてはこれからである。

焦眉に懸かる問題は思想的に血族同胞が內に於て、唯一の認識、大信念の下に結束し、外に對して一體一丸となり皇國未曾有の難關を突破し、發展進出することだ。この爲めには國家に於て、有力なる思想統制部の如き一大機關を設置して徹底的指導と、非國家的思想の監視に任ずることは、皇國々民指導原理の本質より觀て、時局の重大なるに徵して、露西亞、伊太利、獨逸の政策に見ても極めて自然であらうと信ずる。即ち世には思想に對するに思想を以てすると唱へて、種々の氣休め的一時の思想善道機關を設置し、統一を爲し得る如く期して居る者があるが大なる誤りである。

思想統一には中心が必要である。その中心たるや、國内に絶對唯一の中心でなければならぬ。思想對立、國内に對立する數個乃至二個の思想を亡滅廢絶して、單一無二の中心に據らしめ得た國家のみが、存立を確保して強國へと發展し、しつゝある。

活眼を大局に太き輪廓を定めて對策にかゝれ

最後に思想對策應急具體的方策に就て一言したい時局の刺戟を受けて、續々と愛國團體、憂國の結社が生れる。都市に農村に、軍事團體の、學生の、或は國民勤勞大衆に依つて祖國擁護運動が期せずして、澎湃として捲き起されつゝある。にも不拘一面に於て所謂思想不安の影は依然たる濃暗を示して居る。

この傾向に對して衆議院は、第六十四議會に於て全會一致を以て思想對策決議案を可決し、貴族院亦同問題を含む決議案を可決して、政府に之が對策の急速確立を促がす處あつたのであるが、既に政府部内に於ては之が對策實行案の骨子に就て討議を進めつゝあつて、本案の

内容の主眼とする處は、政府は思想對策問題に關し、關係各部を通じて連絡統制ある統制機關を設置し、從來の檢察取締に止まらず、思想惡化の根源除去に努めて、教育、社會行政各方面の緊密な連繫に依つて善導の效果を期せんとするに在つて、その政府各部を通じた統制機關を設置する趣旨に於ては、私が今日まで屢々私見として新聞雜誌紙上其他種々の機會に於て、識者に示教を仰げる處で、今日非常時これが實現の氣運に到達したることは、邦家の爲め欣快に耐へざるものがある。

乍然目下のところ右の對案の骨子として記されたる處に依れば、內閣、內務、文部、司法の各當局が中心となり、次官局長等が該統制機關の構成分子となつて組織すると爲すにあるものゝ如くであるが、此點に至つては私の持論とは所見に於て徑庭がある樣である。即ち私の期待して歇まざる政府各部聯合統制機關とは、首相若くは首相級の人物直屬の下に、關係閣僚及び、朝野を網羅せる權威者の一大指導機關と爲し、更にこの機關を威力ある執行機關とまで期待するが爲には、思想對策の爲に新に一省を設置するも可なり、である。何となれば現下非常時の危局とは一言に掩へば、國防問題と對內的に國家財政、國民經濟の問題と共にこの問題を措いて他にあり得ない。否寧ろ國家として他の何れの問題よりも第一に考慮すべき重要なる政治部門でなければならない。國民思想問題は第一の關門で然して最後の關門である。

人躰の例にしても精神的疾患があつては凡そ問題にはならない。この意味に於て現時思想の動向を展望する時には、軍事外交經濟通問題に關して屢々設置せられたる有力大規模なる調査諮議機關の例に較べても、焦眉の急に應じて思想統制中心機關として、權威ある國家的施設が確立されねばならない。

然し乍ら、斯る中央統制機關が創設されるとしてもその目的、機能は一般内外政務、軍務とその内容に於て超然たる別個のものではあり得ない。換言すれば、今日ある一切の政治的機關及經濟、社會的諸機構は究局の大目的に於て思想對策の結論と背弛するものであつてはならない。然るに我國の實情は皇軍の組織と機構に於てのみ思想統制が

完全に行はれ、精神、思想を行動に遵奉、實踐されて居る外に、政治經濟、社會の實情に於ては往々にして却つて國民思想を導いて惡化する矛盾を事實として否定する事が出來ない。だからと云つて以上の全機構を悉く誤破算する譯にも行かない。理論と現實の矛盾がこゝに在る。けれども前述の意味から根本治療を行ひ得る統制機關を先づ確立すれば、これを中心に各般の施策、組織の過誤は漸を追つて修正を期し得られる。勿論該機關は政爭の上に在らねばならない。同時に國民思想の源泉であり、搖籃であり、更に叙上の意味に於ける科學的大成の大任務を、その各段階に於て課せられたる學術教育を管掌する、一國文教の首腦者も亦政爭、黨爭の上に超然たる、寧ろ一般行政と切離

して、獨立恒久的地位を保障されねばならないことを本來の立前とする。

斯くて一切の清算整理時代は本論の期に歩を進めんとする。（完）

石井三郎著

（總布天金上製箱入 四六版二百二十頁 實費送料共壹圓廿錢 殘本僅少）

日本國家と富豪

（世界財閥の解剖）

——內容要目——

時局と政界財界—停止線上の財界巨星—資本膨脹下の社會相—金權か政權か—資本家と政黨との分離傾向—明治維新の片貌—列國の主要財閥—世界財閥最近の惱み—各國の農村不況及疲弊問題。

東京千駄ヶ谷

發行所　皇道義會出版部

昭和八年四月二十日印刷
昭和八年四月廿五日發行

（定價金拾五錢 送料金貳錢）

著者　東京市澁谷區千駄ヶ谷町四丁目六百五十八番地　石井三郎

印刷所　東京市深川區永代二丁目九番地　東洋社山田印刷所　電話本所四七一六番

發行所　東京市澁谷區千駄ヶ谷町四丁目六百五十八番地　皇道義會出版部　電話四谷五六六〇番

（禁轉載）

終